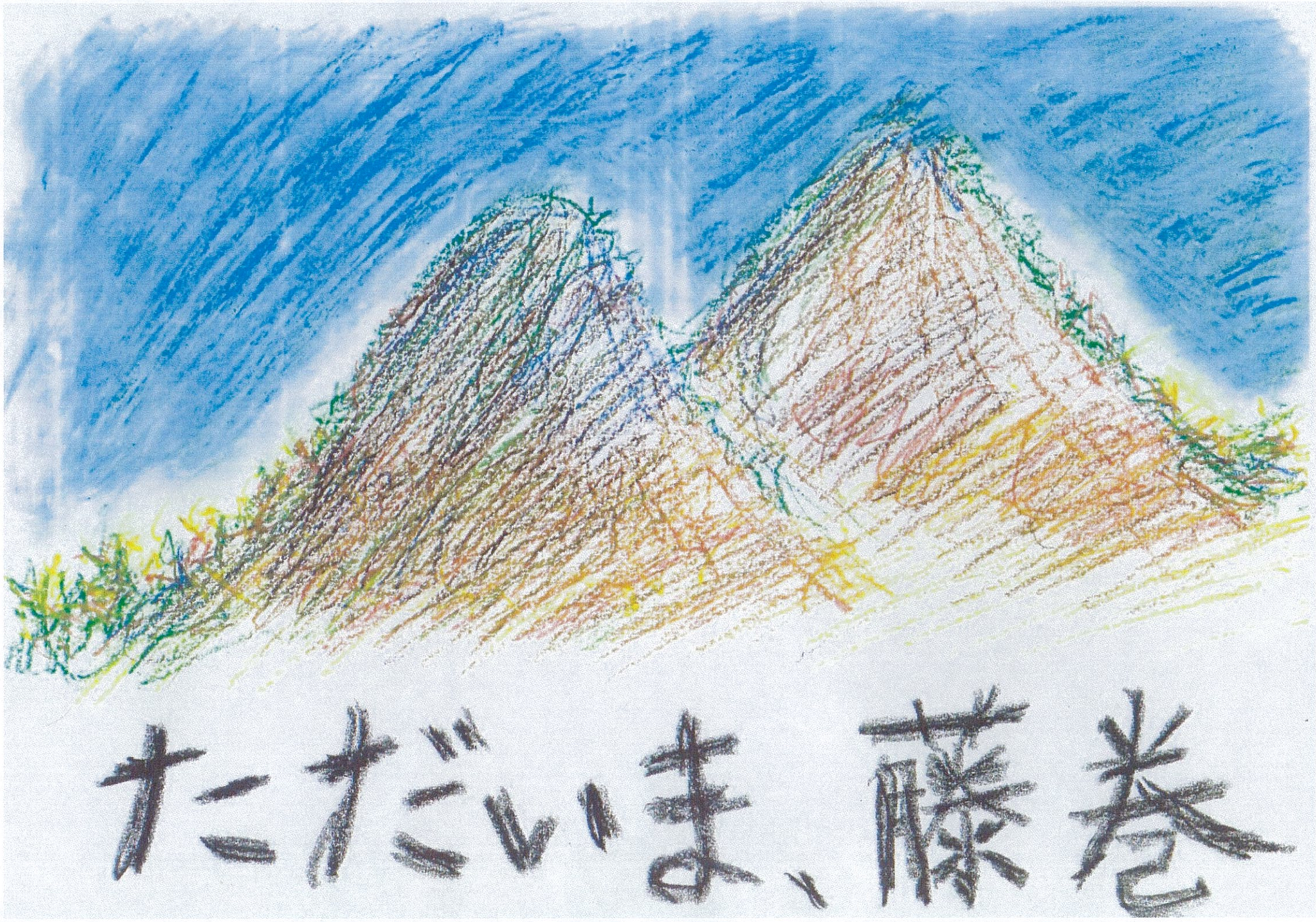
大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業

最終報告書

（第一部）

2010年3月

福島大学現代教養コース
コミュニティ共生モデル
ビックブラックゼミナール


ただいま、藤巻

抜けるような濃いブルーの青空

私は、こんなにも美しい空をみたことがあっただろうか

こんなにもきれいな透明な空気が存在している

日々の生活に忙殺され忘れかけていた大切なものが

ここには変わらずにある

何ともなつかしい空気が

時間が流れている・・・

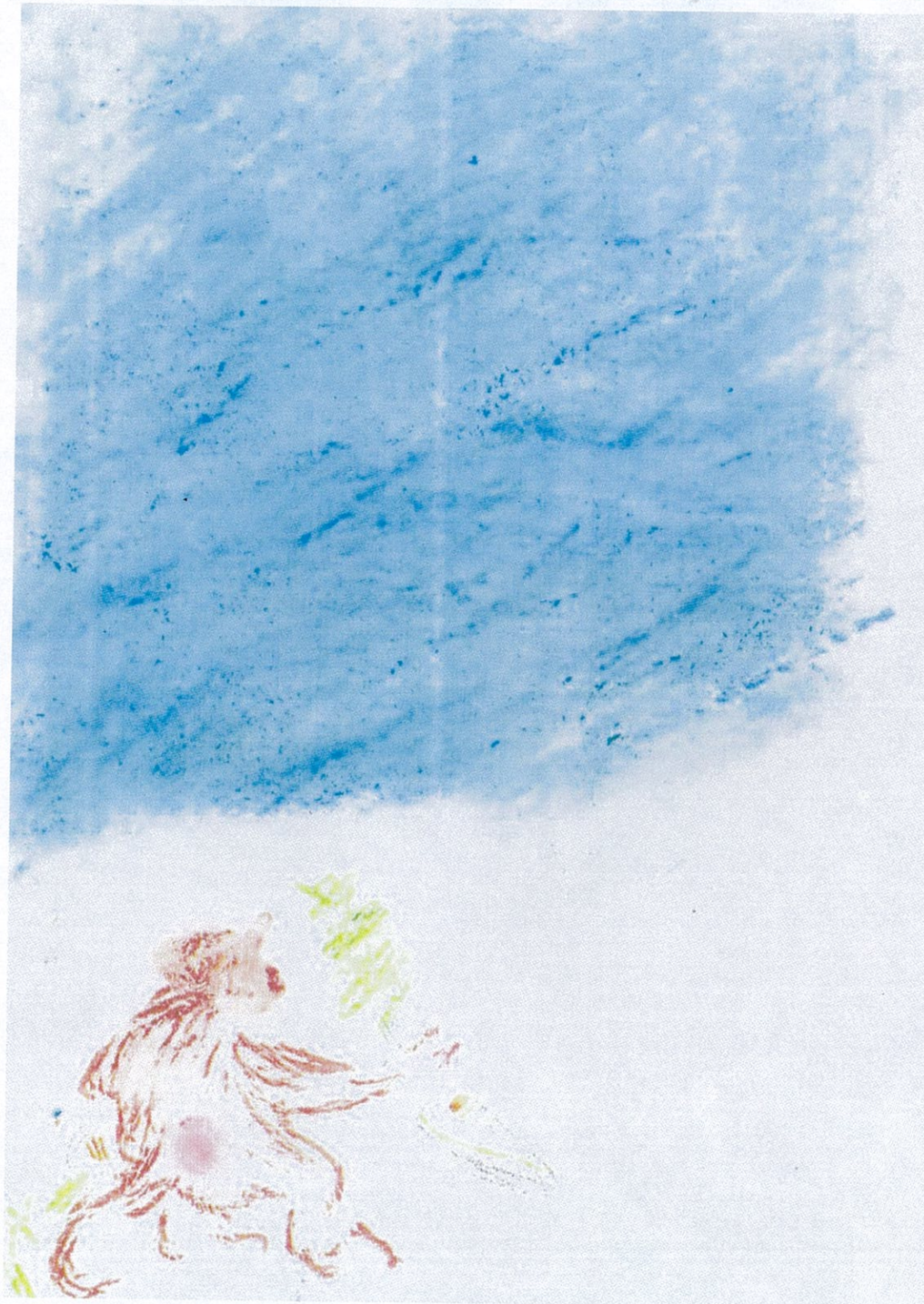
そんなとっておきの場所　喜多方市山都町藤巻地区

今頃は、きっと深い雪と共に　いつもと変わらぬ生活を営んでおられる

藤巻の皆さんへ

感謝の気持ちを込めて

飯豊山という高い山の奥に藤巻という村がありました。
そこで暮らす小椋のおじいさんはこのところ悩みがありました。
「まだ さるのしわざがぁ！」
ここ藤巻には“赤すじ大根”という
ご先祖様から伝わる珍しい大根があります。
大切に守ってきた“赤すじ大根”のような野菜を
食いあらす猿に村中で頭を痛めていました。
一方の猿は、これがかしこい猿たちで
藤巻の野菜の味をちゃぁんと知っていました。
「やっぱり 小椋のおじいちゃん達のつくる野菜はほかでは食えねえなぁ」
「んだ、んだ」
「最近は藤巻でも 人がいなくなってきたなぁ」
「みんな どこに行っちまったもんか・・・」
悪さばかりしているように見える猿たちですが
猿たちは猿たちなりに藤巻とそこに住む人々に気持をよせていたのです。



小椋のおばあさんは
藤巻から若者が離れてゆくの
さびしく思い
毎晩月をながめながら
「人恋しいなぁ・・・」
と、つぶやいていました。

そんな心やさしい
おばあさんの野菜をくすねて
ごちそうになっている
猿のウッキーは、
おばあさんのために
何かしたいと
思いはじめていたのでした。

その様子を見ていた風神さまが
ウッキーの前に現れてこう言いました。

「ウッキー、
小椋のおばあさんのために
何かお手伝いしてみたら
どうじゃ？」

「お手伝い？」
ウッキーは首をかしげて言いました。

「これまでの悪さを　帳消しにしてやるから
そうじゃな・・たとえば、
つけもの作りを手伝うとかじゃ。」

「それだ！」

次の日、ウッキーは小椋のおばあさんを訪ねました。
追い払われるのではないかと ドキドキしながら
「おばあちゃん」
と、声をかけると おばあさんはびっくりした顔で
「はて、猿が何の用かね？」
「おばあちゃんに、つけものの作り方を教えてほしいのだけど・・」
真剣に頼みこむウッキーを見て、おばあさんはにっこり笑いました。
「そんなに つけものを気に入ってくれたがい？」
と言って、ウッキーにつけもの作りを教えてくれるようになりました。
ウッキーは毎日おばあさんのもとで、たくさんの大根のつけもの作りを手伝いました。
時には失敗しながら、おばあさんに温かく見守られて
着々とつけもの作りを覚えていくウッキー。
おばあさんも、いつしか毎晩のさびしさなど忘れ始めていました。
おじいさんたちは、はじめのうちはウッキーをいぶかしげに見ていましたが、
熱心に手伝うウッキーを見て かつて子どもたちが手伝いをしてくれたことを
思い出し、ほほえましく思うようになりました。
「子ども達が藤巻にきてくれたらなぁ・・・」
だんだんと歳を重ね
農作業や時雨れる日のなめこの収穫が
体の負担になってきていました。
“若い人が藤巻にいてくれたら”
そんな本音が
出てきました。
「ところで ウッキー、
こんなにたくさんどうすんだ？
ウッキーはにっこりして
「いまは ないしょだい！」
とだけ答えました。

季節は冬をむかえ、つけものができあがりました。
ウッキーは、今は離れて暮らすおじいさんやおばあさんの家族に
こっそりつけものを送ったのです。
藤巻から離れて暮らす人達に おばあさんと漬けたつけものを食べもらい
藤巻のことを思い出してもらおうと考えたのです。

何日かすると、小椋のおじいさんやおばあさん達の家には
つけもののお礼の手紙が届くようになりました。
その中の一通に孫からの手紙が入っていました。

こんなくさくて
曲った大根
ぼくは食べたことが
ありません。
ほしいのはゲームです。
お母さんにたのまれて
手紙を書きました。
くさいのはきらいです。
さようなら太郎より

これを読んだ小椋のおじいさんのさびしそうな顔
それを見た ウッキーは
「夏に、太郎を藤巻によぼうよ！
一緒に遊ぼうよ！
おいしいものを一緒に食べよう！
へなちょこ太郎を藤巻によぼう！」
「つけものはだめでも、きっと藤巻のことは好きになるよ。
こんなに いい所なんだもの」
「うーん、ほだなぁ・・やってみっか」

まちに待った夏になりました。
なんだか訳がわからず 藤巻に連れてこられた太郎は
とても不機嫌な顔をしています。
しかし、小椋のおじいさんの息子である太郎の父親は、
おじいさんに太郎を預けると
「ここにはゲームより楽しいことがたくさんあるよ」と言い残して帰って行きました。
「ありえねー」ぽつんと太郎がつぶやきました。
「お店もねぇんだ。コンビニなんて知らないのかなぁ」ぶつぶつ独り言を話している太郎に周りはおかまいなし。
「もう少ししたらふろだぁ」
「そしたらご飯だ」
「もうお風呂の時間かよ」
「早くねー?」
小学3年生の太郎はいつも9時頃に寝ていました。
時々は10時になることもありました。
おふろから出ると夕飯でした。野菜がたっぷりの献立。
野菜が苦手な太郎にはちょっと困った食事でした。
「残さず食べらんしょ」おじいさんに注意を受けました。
「だってこの煮物、色が茶色でまずそうだから・・」
「ちっとでもいいがら、食ってみねぇか
はしもつけずに残すのは、わがんね」
仕方なく、菜っ葉の煮付けにはしをのばし口に入れてみました。
「意外とうまい」びっくり、まずそうに見えてもおいしいのです。
「今何時なんだろう」携帯の時刻を見ると、まだ8時にもなっていません。
アンテナが立っていない・・・思いっきり圏外でした。
「今日は疲れたべぇ、 早く寝らんしょ」
おじいさんにうながされるままに布団に入りました。
ガタガタ、ゴトゴト、 少し風が出てきたのか窓やドアがきしむ音がします。
太郎は眠れるわけがありません。
さすがに 夜も更け 網戸越しに外を眺めると、今まで見たこともないぐらいの
真っ暗闇で、背中がぞくっとなりました、
街頭もなく となり近所も、もうとっくに寝たのか明かりが全くありません。
太郎は心細くなって怖くなっていました。
その時後ろから、

「太郎」と呼ばれ、
「ギャー」と太郎は驚いて大声で叫び泣き出しました。
「どうした、ねれねぇか？」おじいさんでした。
「僕暗くて・・・」

「そうか、暗くてたまげたが
ここでは無駄なことはしねぇんだ
夜はみんな寝でっぺ
ぴかぴかと明かりをつけるごとねんだ
町のみんなは、どんだけのいらねぇ明かりをつけっでこどが」

「ほら、どうせ寝らんにんだべ
ちっと　外出てみっか」
太郎はおそるおそる真っ暗な外へ出てみた。
だんだんと目も慣れてきたとき、おじいさんが
「ほら、上を見でみらんしょ」
「うわぁー・・・」
そこには太郎がプラネタリウムで見た星空と同じくらい
いいえ、無限の星が光っていました。
太郎の目も輝くのを　おじいさんは嬉しそうに眺めていました。
いつからつないでいたのか　おじいさんと手を繋いだままで
太郎はすっかり星空に魅せられ　言葉を失っていました。

「ほら　あそごを見てみぃ」
目を向けると　やさしく光るものが光を放っていました。
「あれがなんだか　わがっか？」
「・・・・・」
「もしかして　蛍？」
「んだ、蛍の光だ」
「きれい・・・」

それから　どのぐらい　時間がたったのでしょうか。
太郎が気がついたときは、太郎は布団の中にいました.

もうすっかり日が昇り、朝になっていました。
「寝坊すけしねえで、ご飯の支度手伝えよ」とおじいさんに言われ、
昨晩のことは夢だったのか、それとも本当にあったことだったのか。
ぼーっと考えながら、聞いてみました。
「おじいちゃん、きのうの夜中のことだけど・・」
「うん、どうがしたが?」
「僕、星を見て、生まれて初めて近くで蛍を見て
そしたら朝 自分の布団にいたんだけど・・」
「んだ。蛍を見ていたらいつのまにか ぐーぐーと寝ちまってたんだ
だがら、おぶって 布団に連れて行ったんだ
おまえは何キロくれあんもんだか。重かったぞ」
「おじいちゃん ありがとう」

今日の藤巻はいい天気。やさしい風が吹いています。
まるで 太郎を外に誘うように。
「今日は何をすんべ、釣りさでも行くかい」
「えっ、釣り? 僕、釣りしたことないけど」
「大丈夫だ、えさつけて垂らしておけばいい」
お昼になっても太郎は一匹も釣れませんが、おじいさんはさすがです。
もう何匹も釣りました。
飽きてきた太郎はお弁当を開けてみると、
大きいおむすびが二つ入っていました。
太郎の好きなウィンナーなんて入っていません。
少しがっかりの太郎でしたが おむすびをパクリ。
「うめー」梅干し入りのおむすびのおいしいこと。
そしてなんと、あのくさいたくあんが お弁当に入っていました。
おじいさんは それをポリポリと音を立て おいしそうにかじっていました。
太郎は、くさくて いびつなたくあんが食べられませんでした。
でも、おじいさんがあまりおいしそうに食べるので
ばくっと、一口かじりました。
口の中で、、、においは決してなくなりはしないけれど
案外いやなものでありませんでした。
歯ごたえと ちょうど良いしょっぱさが後引くうまさに、
太郎はたちまち くさいたくあんのファンになりました。

その様子を　木陰からそーっと見つめる陰がありました。

ウッキーです。

太郎が来る前、ウッキーは　おじいさんたちやおばあさんたちと
たくさんの時を共に過ごしてきました。
しかし、太郎の訪問でおじいさんもおばあさんも皆楽しそうで
ウッキーのことを忘れています。
でもウッキーは　おじいさんやおばあさんの笑顔が大好きでしたから
今の藤巻に吹く　この風を　本当に嬉しく感じていました。

ウッキーが呼び寄せた　やさしい風です・・・

「くさいものはいやだと言っていた
　へなちょこ太郎も
　オレ様が作ったたくあんのおいしさにやっと気がついたか。」
「うれしいなぁ、ったら　うれしいなぁ・・・」ウッキーも幸せでした。

この日を境に、　太郎は積極的に　自分から外に出るようになりました。
そして　野菜の畑も手伝い
自分が収穫した野菜を　喜んで　食べるようになったのです。
「ここには　虫がたくさんいるけど、どうして?」
「せっかく植えて芽が出て育っている大根の葉っぱを抜いちゃうの?」
太郎は、不思議に思ったことをどんどん質問するようになりました。

同時に藤巻では　お盆の支度がぼちぼち始まっていました。

「お盆には　お父さんもお母さんも来るよ
　僕を迎えに来るんだ」

今年は、ちょっとにぎやかなお盆になりそうです。
なぜって　ウッキーがつけものを贈った時に、
“夏にはぜひ藤巻に来てください”と　メッセージを添えたのでした。
優しい小椋のおばあちゃんの喜んだ顔が見たい、
ただそれだけの一心でした。

今日は、お盆の夏祭り。
太郎も 庭に咲いている花を摘んで ご先祖様の仏壇にそなえました。
遠くからふるさとに戻り、
「藤巻、ただいまぁ」
お墓参りをして、藤巻でとれた野菜で作ったたごちそうを囲みます。
太郎の両親も 遠く四国から太郎を迎えに来ました。
「お父さんー、お母さんー、ここだよー」太郎は木の上から叫びました。
「た、太郎、すごいなぁー　そんなに高くまで自分で登ったのかい」
太郎の両親は、すっかりたくましくなった太郎を目を細めて見上げました。
宴会がはじまり、あまり口数が多くないおじいさんも
おいしいお酒でほろ酔い気分、すっかりできあがり嬉しそうでした。
やがて、盆踊りもはじまり 老いも若きも大家族のように踊っています。
おばあさんも、足腰の痛みも今日はなんだか軽いようです。
涼しくて気持ちのいい風のせいかなぁ・・
風神さまの粋な計らいかねぇ。

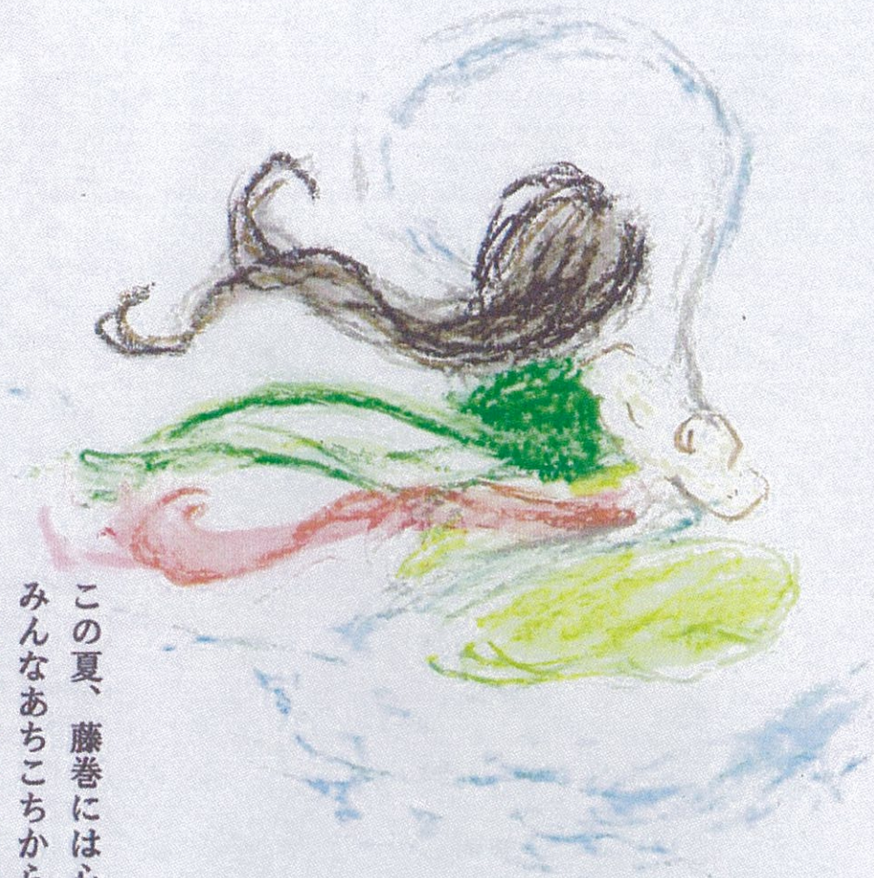
祭りは終わり、夜が明けました。
それぞれが それぞれの生活に戻っていきます。
ここでの日々が　太郎にはかけがいのない夏の思い出になりました。
太郎のお父さんは，小椋のおじいちゃんに言いました。

「父さん　ありがとうございました
おかげで、太郎はたくましくなりました
たいせつなことを
父さんと この藤巻の皆さんが
伝えてくれました
俺が子供のころ
おじいさんに教わった
あの時のように、
また来年も太郎と遊びに来るよ」

「ありがとう
おじいちゃん
おばあちゃん
僕また来年来るよ
やくそくだよ！」

「うん、わかった。まだ来いよ！」

太郎と おじいさんは
約束のゆびきりをして別れました。



この夏、藤巻には心地よい風が吹いていました
みんなあちこちから集い
ここでの再会を喜び合いました

そのむかし、
藤巻は　一つの家族のようなものだったといいます
今は、それぞれの生活があり
藤巻を離れて暮らす家族が多いけれど
その気持ちは　ずっとつながっています

ごちそうを囲み、酒をのみ、笑い、
昔からある自然にいだかれて
ほっと一息

そして　誰もが太郎のような
無邪気な自分にもどることができる

そんなやさしい風を
風神様が
みんなに
さずけて下さった
かもしれません

お礼にかえて

福島大学の学生を歓迎してくださり、知識も体力もない私達に畑仕事や漬け物づくりを教えてくださった 藤巻の住民の皆様本当にありがとうございました。

皆さんと一緒に大根の漬け物を漬けたことや、火を囲み お酒を飲んで、お話をして楽しい時間を過ごさせていただいたことは、私達にとってかけがえのない宝物になりました。

「藤巻、万歳!!」

私達にすばらしい出会いをくださった風神さまに感謝。

また、この出会いを応援してくださった喜多方市役所の皆様はじめたくさんの方々にこの場をお借りして 心よりお礼申し上げます。

ありがとうございました。

そして、再び

「ただいま、藤巻。」と訪れる日を楽しみにしております。

平成二十一年度 福島大学 大黒太郎ゼミ
二年生 文‥‥山下敦子 高橋かおり 佐藤侑加
絵‥‥佐藤侑加
編集‥高橋かおり

大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業

最終報告書

（第二部）

2010年3月

福島大学現代教養コース
コミュニティ共生モデル
ビックブラックゼミナール

福島大学
ビックブラックゼミナール

大学生の力を活かした集落計画

【１枚目の説明】

私達ビックブラックゼミナールは、福島大学現代教養コース・コミュニティ共生モデル２年の演習で、合計２０名で１年間活動してきました。私たちのほかに、地域でのフィールドワークの経験を豊富に持っている４年生や、行政政策学類の教員やそのご家族の方にも様々な形で関わってもらい、多くの人に支えられて、約半年間の本プロジェクトを実施してきました。

私たちのプロジェクトの目玉は、２００９年１１月７日、８日の両日に実施した、喜多方市山都町藤巻集落での調査活動とその報告会です。本報告の前半は、この時に藤巻の皆さんの前で報告した内容が中心になります。後半は、両日の調査活動や報告、そして私たちが学んだことや考えたことを「藤巻集落活性化策」（案）として３つにまとめ、その内容について報告するものです。

藤巻集落プロジェクトとは？

福島県の委託事業

「大学生の力を活かした集落活性化調査委託事業」を受託

福島県7地域の集落と大学生グループをマッチング

会津地方は、藤巻集落と福島大学ビックブラックゼミナール

藤巻集落

喜多方市山都町藤巻地区（総合支所から車で40分）

9世帯16人（高齢化率93.75％）←→6世帯10人（100％）

木地師たちの集落

ビックブラックゼミナール

現代教養コース基礎演習（コミュニティ共生モデル2年）20人

【２枚目の説明】

藤巻集落プロジェクトとは、福島県の「大学生の力を活かした集落活性化調査委託事業」を受託した私達、ビックブラックゼミナールが、喜多方市山都町藤巻集落のみなさんとともに、集落の将来とその活性化を考え、一緒に行動していくために立ち上げられたプロジェクトです。学生２０名に担当教員１名を加え、またその都度、地域でのフィールドワークの実績がある先輩学生、行政政策学類の教員やその家族、そしてなにより、喜多方市役所や集落支援員の方々の支援・援助をいただきながら、実施してきました。

8月5日記事
福島民友

福島大生が聞き取り

喜多方 県の集落活性化調査

県の過疎・中山間地域振興戦略「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」に参加する福島大のビックブラック・ゼミナール（大黒太郎行政政策学類准教授）は4日、調査研究先の喜多方市の藤巻集落を訪れ、集落の現状などを聞き取り調査した。

藤巻集落で住民らの話を聞く大黒准教授㊧と学生ら

藤巻集落は同市山都町北部に位置し、わずか6世帯10人が居住する地域。同ゼミは9月末から同集落に滞在し、本格的な調査を開始する。この日は関係者へのあいさつと事前調査のため、大黒教授と学生7人が集落を訪れた。学生らは活性化のアイデアを練るため、小椋実区長ら住民に集落の歴史や暮らしなどについて話を聞いた。

同事業には県内外の大学から7団体が参加。若者の視点から過疎・中山間地域の振興を研究、調査報告書を作成して発表する。県が調査費を補助する。

【３枚目の説明】

私たちの活動は、新聞報道などでも取り上げられました。貴重な体験の機会をいただいたこと、また重い責任を負ったことを強く実感した瞬間です。

プロジェクト実施日程

◆7月20日（月）山都町グリーンツーリズム参加
◆8月4日（火）　第1回調査（新聞記事）
◆9月8日（火）　第2回調査
◆9月17日（木）　第3回調査
◆11月7・8日（土・日）第4回調査・本調査
　　全戸調査・検討会・集落討論会の実施/萱刈り・落葉拾い・大根堀り
◆11月14日（土）喜多方市主催シンポジウム「集落支援塾」での研究発表
　　（於：喜多方市
◆11月19日（木）福島県主催「集落活性化県民討論会」での研究発表
　　（於：会津若松市ワシントンホテル）
　　沢庵漬物の仕込み
◆1月14日（木）藤巻集落での「歳ノ神」のお祭りに参加・キャンドルロード

【４枚目の説明】

　プロジェクト全体を通じた藤巻訪問は１０回以上にわたりましたが、最大の活動は、１０月７日・８日の両日に実施した、集落内での調査活動とその報告会です。

プロジェクト総合タイトル

「藤巻集落プロジェクト
ー私たちが藤巻に出会えた奇跡！」

“キーワード”
「藤巻民」を増やそう！

【５枚目の説明】

私達のプロジェクトの総合タイトルは、「藤巻集落プロジェクト・私達が藤巻に出会えた奇跡」としました。キーワード「藤巻民を増やす！」です。

私たちの考えること

坂下雄洋が語ります！

【６枚目の説明】

今回この「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」に参加した７つの大学の中で、私達が担当した藤巻集落は、住民が１０人でほぼ高齢者というもっとも小さい集落でした。８月に初めて藤巻を訪問してから、区長さんの「集落をなんとかしたい」、という思いと、澄んだ空気と風神様の伝承話、おいしい山菜料理、豊かな土地資源などを目の当たりにして、私達にできることは何か、真剣に考えてきたつもりです。この事業を通じて私達は、地域の資源を活性化にどう結びつければいいのか、それを考える貴重な機会をいただきました。

日本各地で本格的なグリーンツーリズムや農家民泊など「都市農村交流」で集落の活性化を目指す取り組みが多い中で、こうした取り組みをそのままこの藤巻集落に当てはめるのは難しいことは、早い段階で理解できました。私たちのプロジェクトはそこから始まります。

たしかに、集落を中心に人や物の「交流」を活発にすることが集落の維持や継続、活性化にとって大切なことは明らかですが、本格的な都市農村交流・グリーンツーリズムの実施はまだまだ先の課題でなるとすれば……とても難しい課題です。

私達は、藤巻にやってくる「お客さん」を増やすのではなく、集落内外を問わず、今現在、藤巻集落のことを大事に思い、また何らかの形で藤巻に関わっている方、関心を持っている方（＝私たちはこの人たちを「藤巻民」と呼びます）を少しずつ「仲間」として増やしていこうと考えました。そのために私達はこの２日間の活動に身近な存在から藤巻に住んでいる息子さんや娘さんにアンケートとお手紙を送るとともに、私たちのプロジェクトへの参加をお願いしました。１０月７日・８日の調査活動・報告会は、集落の方ばかりでなくそのご家族も一緒になって、集落の将来を考えるいい機会になりました。私たちの活動の一つの成果です。

「藤巻民」をどう増やすのか？これが私たちの研究テーマとなりました。

活動内容「藤巻民になる！」

１日目　11/7（土）

「歳の神」（1/14）のための萱刈り

翌年の農作業のための落ち葉拾い

集落内世帯の聞き取り調査

２日目　11/8（日）

赤筋大根掘りと漬物加工

手打ちそば講習会

活動報告会・交流会

【７枚目の説明】

まず２日間の活動内容を報告します。１日目の午前中は「歳の神」のための萱刈りと翌年の農作業のための落ち葉拾いを行い、午後からは集落内世帯の聞き取り調査を行いました。２日目は午前中に赤筋大根堀りと漬物加工を行い、手打ちそば講習会をして、昼食にそばを食べて午後から藤巻の方々と２日間の活動報告会と交流会を行いました。

萱刈りと
落ち葉拾い
（7日）

【８枚目の説明】

これは落ち葉拾いと萱刈りの時の写真です。

聞き取り調査
（7日）

【９枚目の説明】

これは、２・３人のグループで各世帯を訪問して聞き取り調査をした時の写真です。作業の合間に、集落の方々と一緒にタバコをふかしながら話を聞かせていただいたのも、貴重な思い出です。

赤筋大根掘り（8日）

【１０枚目の説明】

これは２日目の大根ほりの時の写真です。収穫した大根は近くの川できれいに洗いました。

漬物加工（８日）

【１１枚目の説明】

漬物加工では大根を塩づけにしました。また沢庵漬けにするために大根をひもで結び干す作業をしました。ここで注目してほしいのは、大根に赤いむらさき色の筋が入っていることです。これが藤巻で作られている赤筋大根で、味は甘みと辛みが絶妙でそばにぴったり合う大根です。

報告会・交流会（8日）

【１２枚目の説明】

この写真は１日目の夜に報告会の資料作りをしている写真と、２日目の午後に報告会と交流会の時の写真です。

私たちはこの活動を通して

「藤巻民」

になることができました★

【１３枚目の説明】

２日間の活動は、藤巻の方々ととても有意義で充実した時間を過ごすことができました。私達はこの活動を通して一人前の「藤巻民」になることができたと感じます。

さて、これまでキーワードにも出てきた「藤巻民」というタームですが、私達が考える「藤巻民」とはどういうものか、について紹介します。

藤巻民って、なに？

現在、藤巻に住んでいる方は10人だが、
何らかの形で藤巻に関わっている方や関心
を持っている方なども藤巻民として考えた。

【１４枚目の説明】

「藤巻民」とは、藤巻と何らかの形で関わりをもっている人たちを指す言葉として、私達が作ったものです。現在、藤巻集落に住んでいる方は１０人ではあるものの、何らかの形で藤巻に関わっている方や関心を持っている方なども合わせて私達は藤巻民と考えます。「藤巻民」は、「土地」に縛られた概念ではなく、「関係」をあらわす概念です。

調査報告①

藤巻民の人数を計算する★

【１５枚目の説明】

それでは、「藤巻民」とはどのくらいの規模を持つものなのでしょうか？
これが、私達の調査の出発点でした。調査結果を報告します。
藤巻集落の人口は平成２０年度１０月１日の「住民基本台帳」によれば、９世帯１６人でした。私達が調査した際に実際に集落内で生活されていた方は、６世帯１０人でした。
しかし、隠れた「藤巻民」は、もっともっとたくさんいるはずです。

踊る大捜査線

「藤巻民を探せ!!」

喜多方市山都町藤巻に注目せよ！

【１６枚目の説明】

「藤巻民」はどのくらいいると思われますか？

ズバリ！
藤巻民は・・・

【１７枚目の説明】

ズバリ、「藤巻民」の人数は…

11845人！

【１８枚目の説明】

なんと、私達の調査結果によれば、「藤巻民」は、１１８４５人にもなります。私達の調査では、多くの方の予想に反して、こんなにも多くの「藤巻民」がいることが分かりました。

ど・・・どうして！？

【１９枚目の説明】

藤巻集落内に実際に住んでいる方は１０人であるのに、どうしてこのような結果になったのでしょうか？

計算の方法（例）

例えば・・・

・1人の人が1日藤巻に関わった＝1人
・息子が1日帰省した＝1人
・喜多方の〇〇さんが缶詰を買った＝1人
・10人の作業員が1日道路工事をした＝10人
・1人の住民が365日藤巻で生活した＝365人

合計・藤巻民378人となります！

【２０枚目の説明】

それでは、私達の調査方法をお教えしましょう。私達は、「１人が１日、藤巻と何らかの関わりを持った場合＝１人」と考えることにしました。例をあげながら説明してみます。

息子さんが１日帰省した場合＝１人、喜多方の〇〇さんが缶詰を買った場合＝１人、１０人の作業員が１日道路工事をした場合１０人、１人の住民が３６５日藤巻で生活した場合３６５人、この例の場合は合計の藤巻民は３７８人となります。

調査結果の内訳

藤巻に住んでいる方　3650人

息子さん・娘さん　97人

移動販売に来る方　50人

藤巻開催のグリーンツーリズム参加者　180人

喜多方市役所・山都支所の方　144人

集落支援員の方　122人

缶詰を買っている方　30人

兄弟　206人

ゴミ収集に来る人　62人

郵便配達員　365人

【２１枚目の説明】

私達は、喜多方市役所山都総合支所のみなさんや藤巻集落のみなさんへのインタビューに独自の人数調査、さらには、藤巻出身者の方々へのアンケート結果などをもとに、結果先の計算方法に従って、「藤巻民」の数を計算してみました。その結果を報告します。

藤巻に住んでいる方は、１０名×３６５日＝３６５人
現在藤巻集落に居住する方のお子さんの帰省　９７人
移動販売に来る方　５０人
藤巻地区開催のグリーンツーリズム参加者　１８０人
喜多方市役所・山都総合支所の職員の方の訪問　１４４人
集落支援員の岩橋さんの集落訪問　１２２人
藤巻でつくられる缶詰の購入者　３０人
藤巻に居住する方の兄弟の訪問　２０６人
ゴミ収集に来る人　６２人
郵便配達員　３６５人

除雪に来る人　30人

除雪車で来る人　30人

県道利用者　3650人

魚釣りの人　750人

山菜採り　750人

氷筍を見に来る人　750人

保健士さん　1人

農協の人　1人

【２２枚目の説明】

除雪に来る人　３０人
除雪車で来る人　３０人
県道利用者　３６５０人
魚釣りの人　７５０人
山菜とりに来る人　７５０人
氷筍を見学に来る人　７５０人
保健士さん　１人
農協の人　１人

宅急便の人　365人

薬屋さん　12人

工事している人　540人

大学生　60人

合計・藤巻民11845人

サルやクマ、鳥などを加えると**無限大**になります！

【２３枚目の説明】

宅配便で藤巻を訪れる人　３６５人
薬屋さん　１２人
工事関係者　５４０人
そして、私達大学生　６０人

以上を合計すると、「藤巻民」が１１８４５人であることが分かります。
さらに、藤巻集落周辺に住む猿や熊、鳥などを加えるなら、藤巻民は無限大となります。

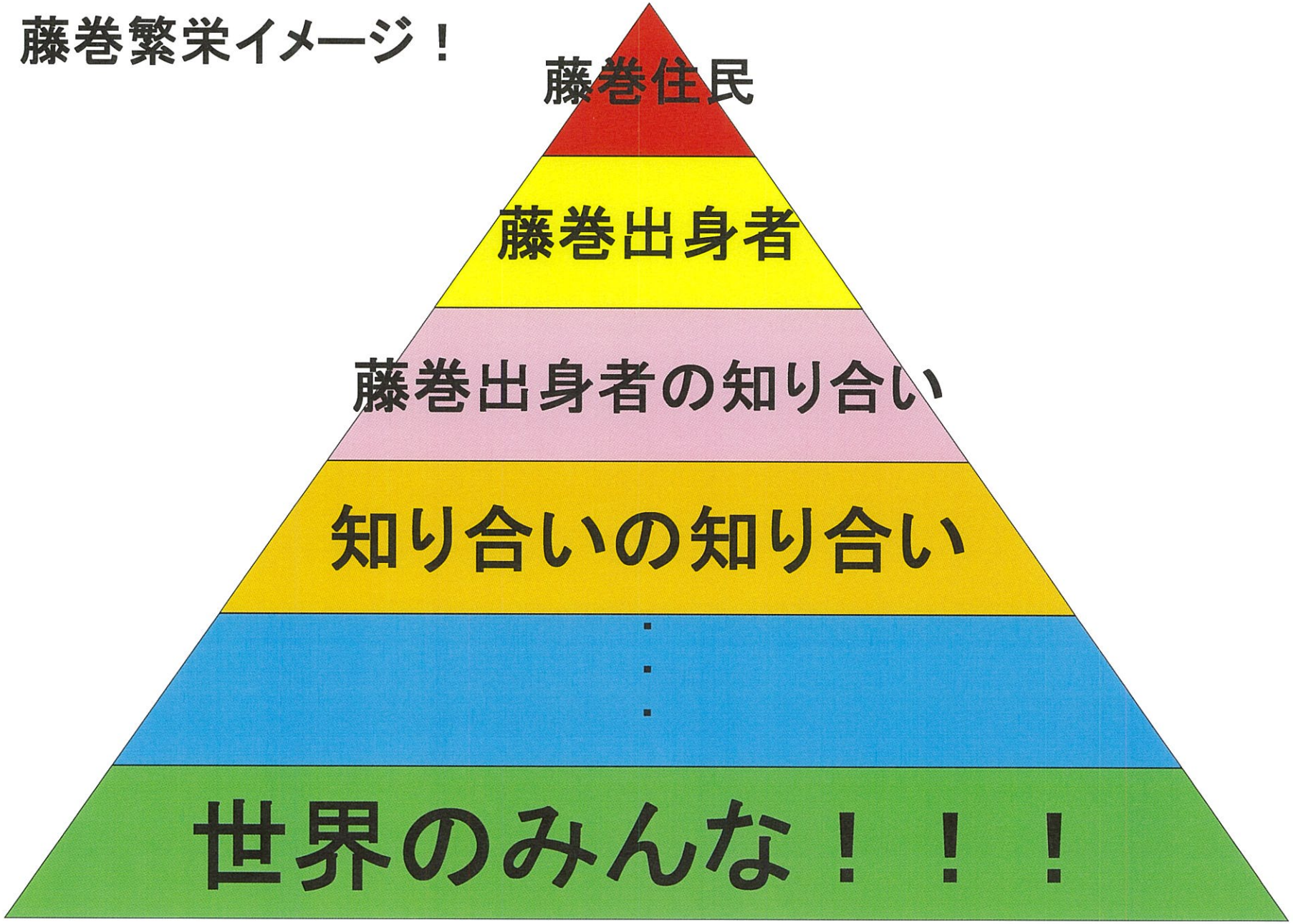
藤巻民を
増やそう！！！

【２４枚目の説明】

この数字、１１８４５人は、私達の調査時点での「藤巻民」の数です。固定的なものではありません。私達が目指すのは、この数を少しずつ増やしていく活動を、粘り強く続けていこうということです。今年が１１８４５人なら、来年は１３０００人を目標に、また再来年は１６０００人へ、と一歩一歩、藤巻と関わる人を増やしていく取り組みが必要ではないか、これが私達の考えでした。つまり、「藤巻民を増やそう！」、これが私達のキーワードです。

私達が目指す取り組みは、実現困難な課題だろうか？、という疑問が浮かびます。現在集落に住んでいる「藤巻民」が１０人しかいないなかで、どうやって「藤巻民」を増やすことができるのか？という素朴な疑問です。私達の試みは無謀な試みでしょうか？

藤巻繁栄イメージ！



【２５枚目の説明】

いえ、決してそうではありません。

私達が描く藤巻繁栄のイメージは、この図に示されています。

今現在、藤巻集落内に居住する住民は１０人であっても、藤巻出身者はもっとたくさんいます。そして、藤巻出身者の知り合いはもっとたくさんいて、知り合いの知り合いはもっといて、さらに…というように藤巻民をどんどん増やしていくことは十分可能です。この考えが面白いのは、最終的に「藤巻民」となりうるのは、「世界のみんな」である、ということです。「世界のみんな」のなかで、１１８５４人を１３０００人に、１３０００人を１６０００人に増やしていくことは、地道ではあっても様々な活動を継続的に実施していくことができるなら、それほど難しい課題ではないのではないでしょうか。

「藤巻」に関わる人を、どうやって増やしていくのか？

私達の課題が明らかになりました。

調査報告②

「藤巻民」関係図

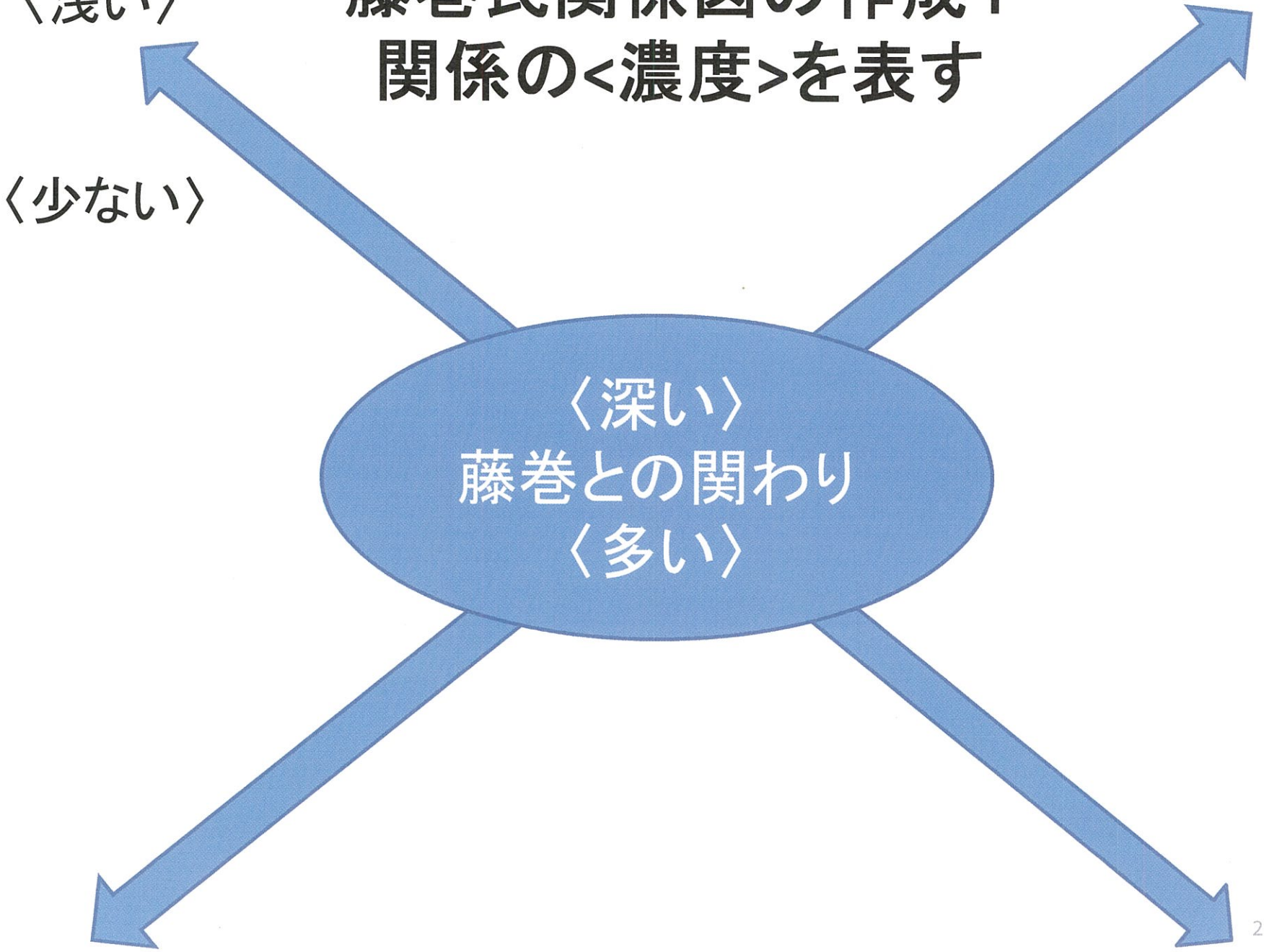
現在★未来

集落の持つ可能性をひらく

【２６枚目の説明】

私達の課題に取り組む活動を始める前に、現在の「藤巻民」の分布がどうなっているのか、またその「藤巻民」が藤巻とどのような関わりを持っているのか、について明らかにしておきたいと思います。この作業は、今後、私達の活動をどうやって世界のみんなにつなげていけばいいのか考える土台になるはずです。

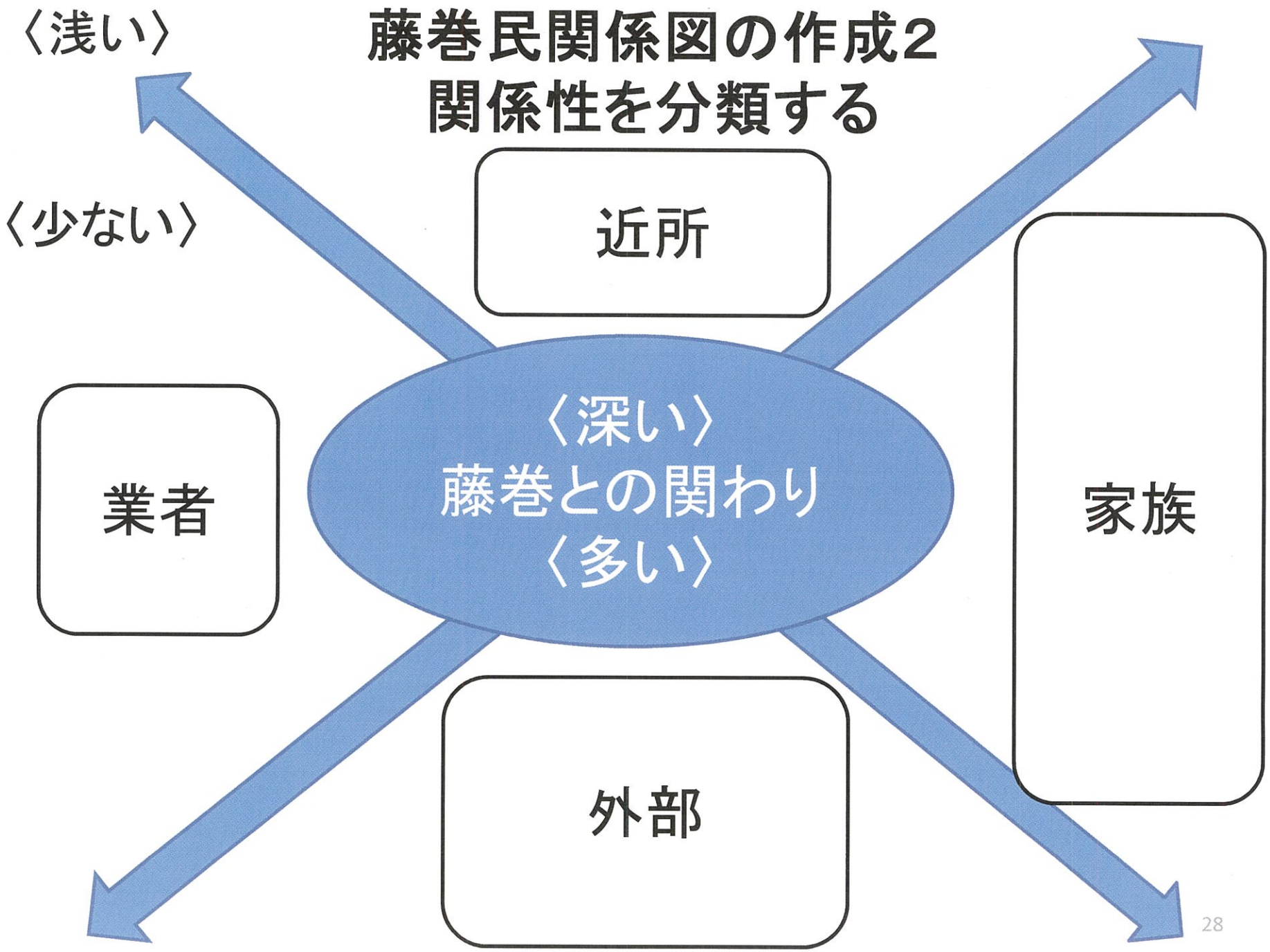
藤巻民関係図の作成1
関係の<濃度>を表す



【２７枚目の説明】

この図は「藤巻民」が藤巻と関わる際の「関係の濃度」を表そうとした図です。中心部に近ければ近いほど、藤巻との関わりが深い、あるいは多いということになり、中心から離れれば離れるほど、関係が浅い、あるいは少ないということを示しています。

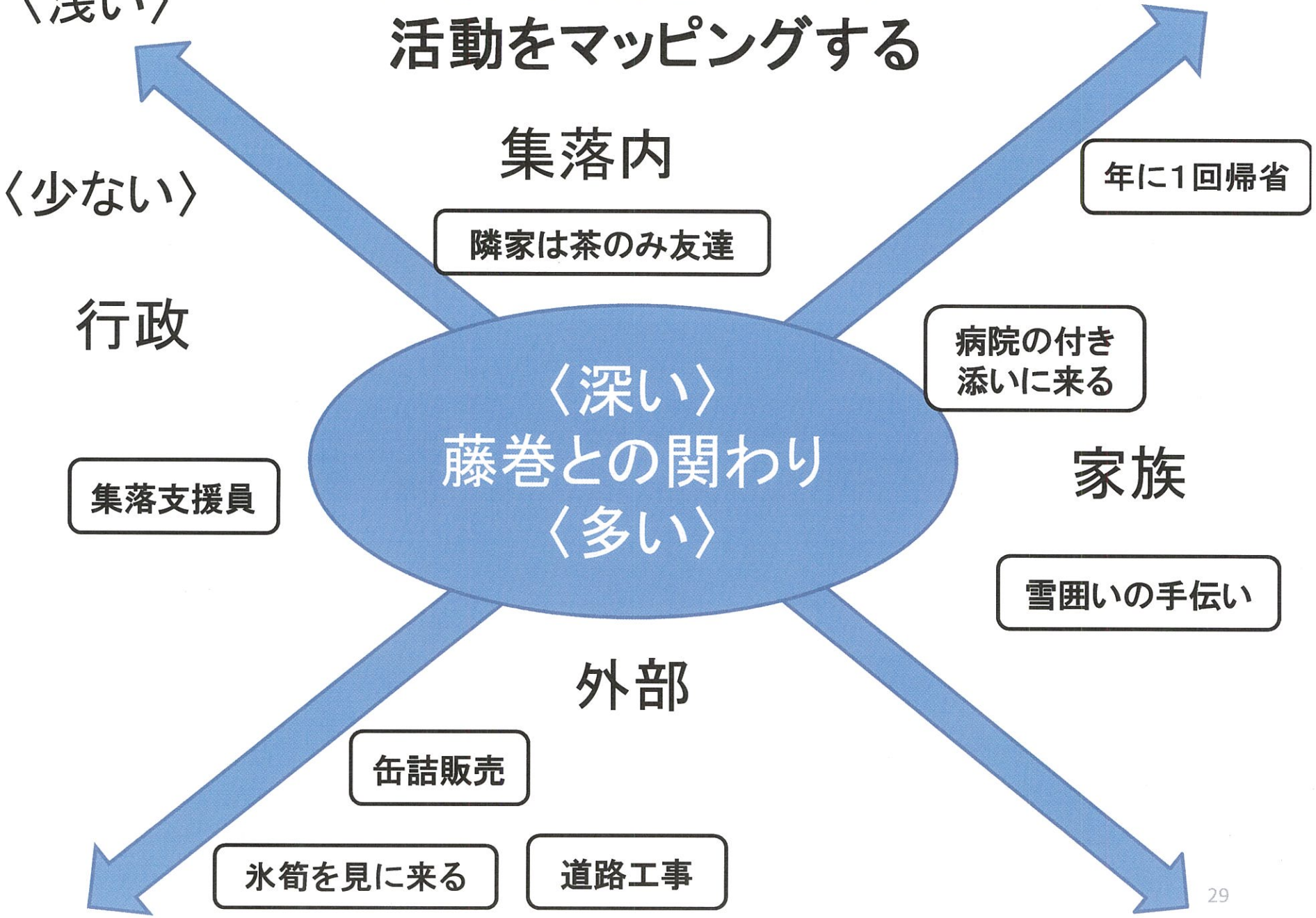
藤巻民関係図の作成2
関係性を分類する



【２８枚目の説明】

先の図に、集落と関わる「藤巻民」の「関係性」を分類した図がこれです。
集落内の関係（「近所」）も含め、集落居住者の「家族」や「行政」、企業や業者、あるいは工事関係者など一般的な形で集落とのつながりを持っている「外部」に分類してみました。

藤巻民関係図の作成3
活動をマッピングする

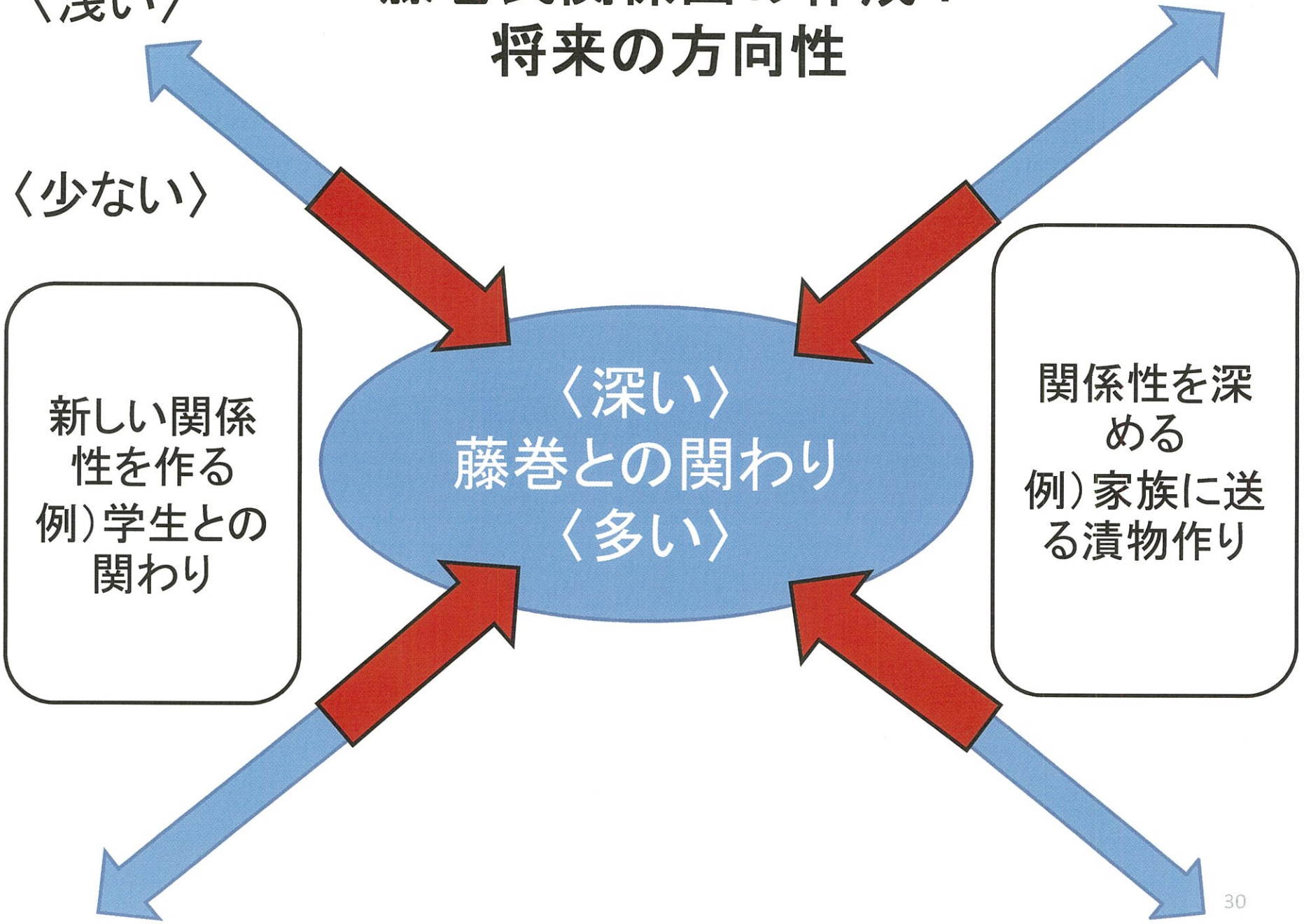


【２９枚目の説明】

集落との「関係性」を、近所との関係、家族との関係性、外部との関係性、行政との関係性の４つに分類したうえで、この図上に、聞き取り調査を行った結果を一部反映させたものがこの図となります。現在の「藤巻民」の藤巻との関わり方について、その「関係性」と「濃度」をマッピングしたものです。

例として「家族という関係性」の領域でいえば、息子さんが年に１回帰省するというのは、「行政との関係性」の領域で、集落支援員の方が週２、３回集落に訪れていることとの対比のなかで、関係は薄く離れた位置におくこととしました。他方で、集落支援員については、関係性がより深く、中心に近いところに位置させてあります。私達は、「藤巻民」の集落との関わりの全てを、この図のなかに分類することが可能になると考えています。

藤巻民関係図の作成4
将来の方向性



【３０枚目の説明】

私達が考えているのは、この「関係性」と「濃度」を、将来的にどのように発展・展開させていけるのか、ということです。

すでに指摘したように、私達が目指すのは「藤巻民」を増やすということですから、この図にある「関係性」と「濃度」を、より多様に、またより濃密にするという方向性を目指すということになります。つまり、藤巻の将来、集落の活性化を図るには、今後の様々な活動を通じて、

①新しい関係性を作る
②今ある関係性をより深める

ことが重要であることが分かります。赤色の矢印が示すように、藤巻との関わりを今まで以上に増やし、またその関わりをより深いものにしていく、そうした活動が求められるということになります。

今ある関係性をさらに深めようと考えるなら、たとえば、集落で漬物を作って集落外に住む家族にそれを送り、集落のことを思い出してもらう、もっと頻繁に家族としての関わりを持ってもらう、ということが考えられます。また、新しい関係性を作ろうとするなら、今回の私達のプロジェクトのように、これまで集落と関わりを持ってこなかった大学や大学生との関わりを作っていく、といったことを考える必要があります。

藤巻との関わりを多く、またより深いものにしていくことが重要です。

調査報告③

「藤巻民」を増やし関係を深めるための
藤巻活性化案

ファイル①味噌は「藤巻民」を繋ぐ
ファイル②藤巻ブランドとしての缶詰づくり
ファイル③若い「藤巻民」を増やそう！

【３１枚目の説明】

ここまでくれば、次の課題は明白です。
藤巻集落の将来に向けて、集落との関係性をより深めていく活動、また、集落との新しい関係性を幅広く作っていくためにはどういう活動を行えばいいのか、ということです。
この課題にこたえるため、私達としては３つの活性化案を考えました。
次にその活性化策を一つずつ報告します。
１つ目が、「味噌は藤巻民を繋ぐ」、２つ目は、「藤巻ブランドとしての缶詰づくり」、３つ目は、「若い藤巻民を増やそう」、です。

ファイル①

★

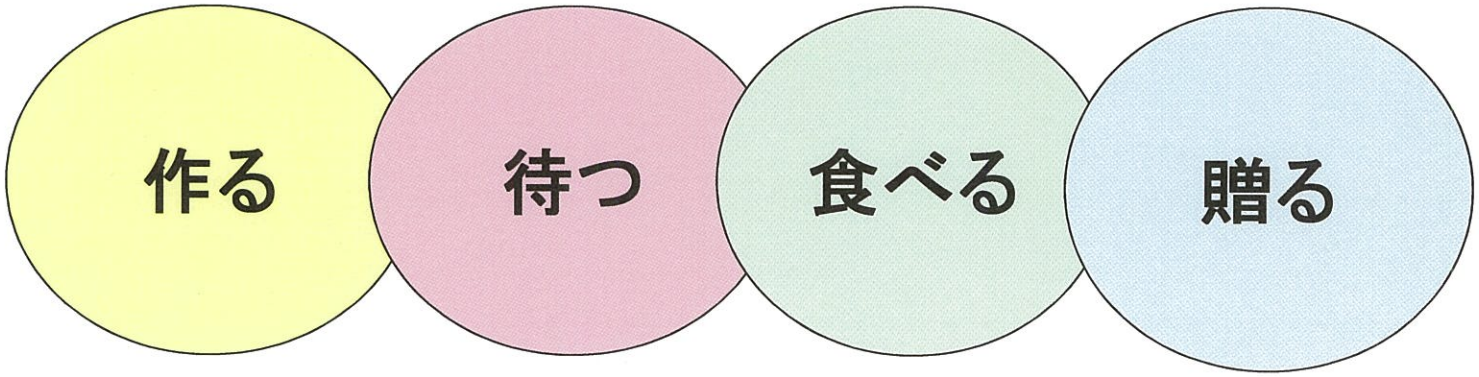
味噌は「藤巻民」を繋ぐ

【３２枚目の説明】

第一の提案は、集落での味噌作りです。今は、買うことが当たり前である味噌は、昔は各家庭で作られていました。この「味噌」を復活させ、「藤巻民」をつなぐ役割を持たせよう、というのが私達のアイデアです。

★味噌作りの4つの楽しみ

味噌作りは作るのは大変だが、出来上がるまでに時間がかかるので段階的にある「作る」「待つ」「食べる」「贈る」の4つの楽しみを基にしながら、それぞれの時間を有意義に使い、味噌作りを通じてその楽しみを一つ一つ味わってもらう



【３３枚目の説明】

そもそも、味噌づくりには４つの楽しみがあります。それは、①作る、②待つ、③食べる、④贈る、の４つです。それぞれの段階にそれぞれの楽しみがあり、集落に住む人たちも楽しみながら、「藤巻民」をつなぐことが可能になります。

★4つの楽しみ

①作る→藤巻民の交流part1

②待つ→藤巻民の交流part2

・味噌レシピを考える・出来上がった味噌を誰に贈るか考える

③食べる→考えたレシピを実際に作った味噌を利用して作る

④贈る→実際に②で考えた相手に添えて味噌を贈る

【３４枚目の説明】

「作る」、「待つ」、では集落内に居住する「藤巻民」の交流につながります。昔を思い出しながら、昔ながらの味噌作りを集落全体で行えば、昔話に花が咲き、楽しい交流となるはずです。仕込みばかりではなく、大豆栽培から収穫までも、このプロセスの中にいれることができれば、それだけ楽しみは大きくなるのではないでしょうか。

「食べる」、では、味噌料理レシピを一緒に考えたりする楽しみが生まれます。

そして、「贈る」。昔ながらの手法で作られた味噌は、藤巻を離れて暮らする方々に送ることができます。味噌作り最大の目的はここにあります。

★効果・展望（まとめ）

・家族と関わるキッカケ作り！

・楽しみが生まれて元気が出る！

・長い期間の味噌作りによって深くかかわりをもてる！

・レシピを一緒に考えることによって、その料理を私たちも外に発信することができるし、レシピを渡した家族にも藤巻のことを思い出してもらう！

・送られた人は手作りの良さがわかり、一緒に作りたい、他のものも試してみたいという興味が沸き、継続性が生まれる！

味噌を通じて「藤巻民」を増やす！！！

【３５枚目の説明】

藤巻に住む「藤巻民」から集落外で生活する「藤巻民」へ味噌を送る――この味噌は、藤巻民から藤巻民への「贈りもの」になります。生活に欠かすことのできない基本食材である「味噌」、かつて日常的に食べていた味噌の味は、離れて生活する「藤巻民」にも忘れられない味になっているはずです。味噌が「藤巻民」をつなぎ、藤巻出身者が、集落や集落で暮らす家族との関わりを強めるきっかけになるのではないでしょうか。

ファイル②

★

藤巻ブランドとしての缶詰づくり

【３６枚目の説明】

２つ目の提案は、「藤巻ブランドとしての缶詰づくり」です。藤巻には小さな缶詰工場が３つあり、ナメコやワラビなどの缶詰が作られています。こうした、藤巻の自然を活かした「藤巻民」の活動を、さらに意味あるものへと発展させていく、そうした試みを考えます。

★缶詰のおもしろいところ

・見えない中身へのドキドキ感
・開けるという行為のイベント感
・中身を目にしての驚愕や納得
・味わった後の満足感

単に“缶詰を食べる”という行為の中に、
これほどの情動が存在している！

【３７枚目の説明】

缶詰は古い発明品でありながら、現代でも多くの可能性を持っていることが指摘されています。缶詰には、①目に見えない中身へのドキドキ感、②開けるという行為に伴うイベント感、③中身を見たときの驚きや納得、④味わった後の満足感、といったような、人間な多様な「感情」を導く、面白い発明品です。缶詰を開ける、という行為に伴うこうした感情をうまく活用しながら、これを、「藤巻民」を増やし、またより深い関わりを持つためのきっかけにしてもらおう、というのが、私達のアイデアです。

★藤巻で缶詰をいかす

・今ある施設（缶詰工場）を有効活用。

・藤巻ブランドとしての缶詰をつくり藤巻を知ってもらう。

藤巻に興味を持つ缶詰マニアがいるかもしれない・・・！

・作った缶詰を子供たちや孫に送って、離れて暮らしていても故郷の味を懐かしく思い出してもらう。

・漬物や郷土料理などの楽しい缶詰も作ることができる！

【３８枚目の説明】

藤巻には小規模な缶詰工場がいくつかあり、それを有効に活用することができます。

また、工場が小規模であることは、大規模工場では不可能なことを試みることができるという利点があることも意味しています。

藤巻という地の利を生かした様々な産品を缶詰につめるとともに、それらの缶詰全てを「藤巻ブランド」の缶詰として売り出すことが考えられます。漬物や郷土料理、藤巻ならではの産品の缶詰など、様々に試してみて、他の業者や地域にはない缶詰を作ることができれば、「藤巻ブランド」の缶詰としての価値が生まれます。

藤巻独自の缶詰＝藤巻ブランドの缶詰ができれば、藤巻に興味を持つ「缶詰マニア」のような人が藤巻と関わるきっかけになる可能性もあります。また、作った缶詰が藤巻の「におい」を持っていれば、その缶詰を送られた他地域に居住する「藤巻民」が、故郷の味を懐かしく思すことにもつながりますし。さらには、この他地域居住の「藤巻民」が、自分たちの友人や同僚に藤巻ブランドの缶詰を贈って藤巻をより多くの人たちに紹介するきっかけになるかもしれません。つまり、藤巻ブランドの缶詰は、新しい関係性を作り出す大きな可能性を持っているのです。

★私たちにできること

缶詰一つとっても様々な
おもしろい企画をたてることができる。

↓

私達にできることは・・・

・新しい缶詰のアイディアを出す！

・手作りの藤巻オリジナル缶詰ラベルを
作ること！

【３９枚目の説明】

缶詰が持っている可能性を広げること、これを試してみる価値は十分あります。
私達としても、新しい缶詰のアイデアを出したり、手作りで「藤巻オリジナル缶詰ラベル」を作るなど、お手伝いさせていただく余地もあるのではないかと思います。

ファイル③

★

若い「藤巻民」を増やそう

～地域の学校を活かして高校生のいる集落づくり～

【４０枚目の説明】

次に３つ目の提案です。タイトルは、「若い『藤巻民』を増やそう～地域の学校を活かして高校生のいる集落づくり」、としてみました。

集落内に
「高校生のいる家庭」を作ることは難しいかもしれない。

しかし、
「高校生のいる集落」を作ることはできる！

どうやって！？

地域の農業高校と都市部高校との交流企画！

【４１枚目の説明】

現在の藤巻集落で、いきなり「高校生のいる家庭」を作ることは難しいかもしれません。しかし、高校生のいる家庭を作ることは今すぐには難しくとも、「高校生のいる集落」は作ることができるのではないでしょうか。

どんな集落であれ、多くの世代が一つの集落内で様々な活動をしていることがとても大切です。「藤巻民」を増やそうという私達の目標からすれば、若い世代の「藤巻民」をどう増やすのかは、大きな課題となります。この課題をどうやって実現するのか、難問の１つです。

私達は、この課題にこたえるひとつの試みとして、地域の農業高校と都市部の高校との交流企画を考えてみました。

地域の農業高校と都市部高校との交流企画！

春の準備：町内高校生による集落内「農地整備」
＝「そば」にふさわしい土地づくり研究

春～夏の行事：両校交流イベント①
＝藤巻での「そばまき」体験・菜種の種まき体験
ホームステイや都市部高校生の世話は、高校で行う。

【４２枚目の説明】

喜多方市には農業高校があります。現在の日本の農業の現状を考えるとき、農業高校で学ぶ必要のあることは、単に作物の栽培の仕方や農業機械の操作といった「技術」ばかりではなく、それをどう販売するのか、どのようにブランドを立ち上げていくのか、といった「経営」にまで及んでいます。また、グリーンツーリズムや農家民泊を通じた都市農村交流、などのように、農業が「観光」や「環境」といった新しい価値を持ったものとして見直される動きも生まれており、そうした新しい動向を学ぶ必要性も生まれているように思われます。

だとすれば、農業高校にとっても、現在、「地域」と関わりながら、大胆に新しい試みに乗り出す必要性や意欲が生まれていると考えてもよいのではないでしょうか。

私達のアイデアは、こうした「農業」をとりまく新しい動向を踏まえて、藤巻を「舞台」に高校生が学ぶことのできる「場」をつくるとともに、それによって高校生が藤巻と関わるきっかけを作りだそう、というものです。そのための仕組み、それが、地域の農業高校と都市部高校との交流企画なのです。

たとえば、「春」には、藤巻集落内の土地を利用して、農業高校生に「農地整備」を行ってもらいます。「藤巻」の気候が蕎麦栽培に適しているとすれば、農業高校生にとっては貴重な「蕎麦にふさわしい土地づくり研究」の舞台になります。

この「農地整備」の意義は、単なる「土地づくり研究」にはとどまりません。春から夏にかけて行われる、都市部高校との交流イベント＝蕎麦の種まき、菜種の種まき体験の準備という性格も持っています。

夏には、都市部高校との交流イベントを開催します。蕎麦や菜種の種まき体験、スポーツを通じた交流などを通じて、都市の若者が、「農業」にどのようなイメージを持っているのか、若者が「農村」とどのような交流や体験を求めているのか、といったことを学ぶ場でもあります。ホームステイなどを組み込めば、若い世代の交流は一気に進むのではないでしょうか。

春から秋にかけての時期には、農業高校は学校行事として、藤巻での農作業に取り組みます。

春～秋：農業高校は定期的に藤巻での「農作業」を行う＝「学校行事」として

秋の行事：両校交流イベント②

＝藤巻での「そば打ち体験、菜種絞り

都市部高校生の家族も「山都町藤巻そばまつり」に参加する

藤巻の野菜を利用、菜種油によるてんぷら　、そば　打ち体験、藤巻そば

【４３枚目の説明】

そして秋。秋には、再び農業高校と都市部高校との交流イベントを開催します。藤巻での「蕎麦打ち体験」や菜種絞りなどには、都市部高校生の家族も招き、「山都町藤巻そばまつり」を開催することも可能かもしれません。藤巻を舞台に自分たちが種をまいてつくった野菜や菜種油を使ったてんぷらは、都市部の人たちにとっては、「ほんとうのごちそう」になるのではないでしょうか。蕎麦打ち体験など、高校と集落が連携したイベントの企画などが実現可能かもしれません。集落を舞台に高校生が学び、また高校生を通じて、藤巻と新たな人々との関係が生まれる、そういう構想です。

効果

教育的効果

・将来の「地域」を支える若者が地域に関わりを持つきっかけとなる

・学校が「地域」全体に支えられ、また地域住民の支持を得られる

地域に及ぼす効果

・将来の「地域」を支える若者が、集落の現在と将来に関わってくれる

・「学校」という地域の安定的な制度に見守られる、長期的な試みが可能となる

「藤巻」にとっての意義

高校生のいる集落⇒新しい関係性が生まれる

【４４枚目の説明】

「藤巻民」を増やすための試みが、藤巻のためだけのものであれば、決してうまくいかないと思います。しかし、その試みが多くの人を巻き込むとともに、その人たちにとっても楽しく意義ある試みだとすれば、この試みは成功するはずです。

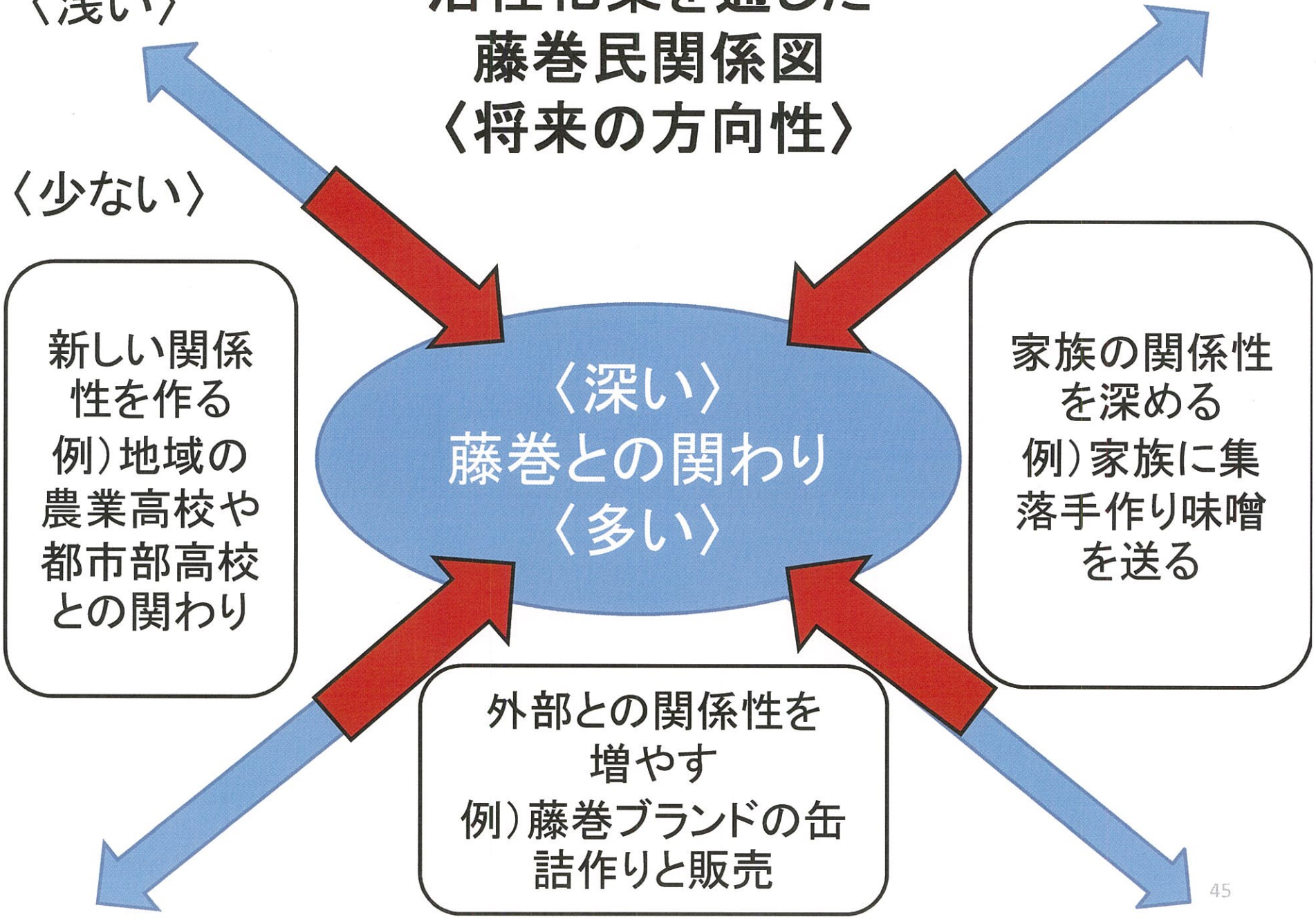
地域の農業高校と都市部高校との交流企画は、それに関わるひと全てに幅広い効果を持つものとして考えられています。

たとえば、教育的効果です。この交流企画が実現できれば、将来の「地域」を支える若者が「地域」に関わりをもつきっかけとなりますし、学校は「地域」全体に支えられ、また地域住民のさらなる支持・支援を得られるのではないでしょうか。

また、「地域」にとっては、若者が集落の現在と将来に直接かかわってくれることにもなりますし、また「学校」という安定的な制度に見守られることによって、「地域」が安定性・継続性を獲得することも意味します。

藤巻にとっては、「高校生のいる集落」となることを意味し、この高校生を通じて、都市部の高校生、さらにはその家族という、新しい関係性を生みだすチャンスにもなっています。

活性化案を通じた藤巻民関係図〈将来の方向性〉



【４５枚目】

以上３つの活性化案を、さきほど示した「藤巻民関係図」の将来像との関わりで考えてみましょう。

「家族の関係性を深める」という方向性を目指すものとして、ファイル①味噌は「藤巻民をつなぐ」が挙げられます。また、「外部との関係性を増やす」という方向性にそうものとしては、ファイル②藤巻ブランドの缶詰作り、が想定されています。また、「新しい関係性を作る」ためのアイデアとしては、ファイル③地域の農業高校や都市部の高校との関わりがあります。これらのアイデアは「例」に過ぎませんが、こうした試みを、大胆かつ継続的に行うことを通じて、「藤巻民」を増やし、その関係を深めていく可能性を見出していこうと私達は考えました。

「藤巻民を増やす」、その試みを様々な形で実現可能である、というのが私達の結論です。

ご協力いただいた
藤巻民の皆さん

ありがとうございました}＼(^o^)／

福島大学
ビックブラックゼミナール一同

【４６枚目の説明】

この活動を振り返ってみると、まず私達がこの企画に取り組んだきっかけは、実際の現場に出て活動を行い、学びにつなげていきたいという思いからでした。しかし、実際に活動してみると、それはとても大変なことでした。私達のゼミは現代教養コースのゼミで、社会人として働きながら大学に通う人もいる中で、みんながそろっての活動や準備等を行うのは難しいことでした。それでも中心メンバーが協力して企画し、それ以外のゼミ生たちも、それぞれにできる範囲で出来る限りの関わりを持ち、担当の大黒先生のサポートも得て、なんとかこの企画を成し遂げることができました。実際に藤巻集落を訪問してからは、ゼミのみんなが、「本当にこの企画に取り組んで良かった」、と思うことができました。大変ではあったものの、とても貴重な機会を得て活動したことは、何ごとにも代えがたい充実した経験でした。１０月の集落内での活動、１１月の県主催の報告会以降も、１月には藤巻集落の地域行事「歳の神」に参加して、藤巻のみなさんとお酒を飲み交わすという交流もありました。

藤巻集落の方々はとても元気のある方ばかりで、まだまだ可能性を秘めた素晴らしいところです。私達はこれからも何らかの形で、藤巻集落の方々との交流を続けていけたらいいと考えています。

この企画に参加し、数々の支援をして下さった方々、とりわけ、「これまでずーっと藤巻民」であった集落のみなさんと、集落のことをよく知らないまま集落にはいった私達学生の間を取り持っていただき、いつも私達のそばで支援と援助を惜しまなかった喜多方市役所の佐藤さんと集落支援員の岩橋さんには、心から御礼申し上げます。新参者ではありますが、私達は「これからずーっと藤巻民」として学生生活を送っていくつもりです。ありがとうございました、そしてこれからもよろしくお願いいたします。

福島大学
ビックブラックゼミナール一同